

書禮袖珍寶

共三

			和書門
	一五	二五	三
	二四	三	類
三	三九	三	
冊	架	函	號

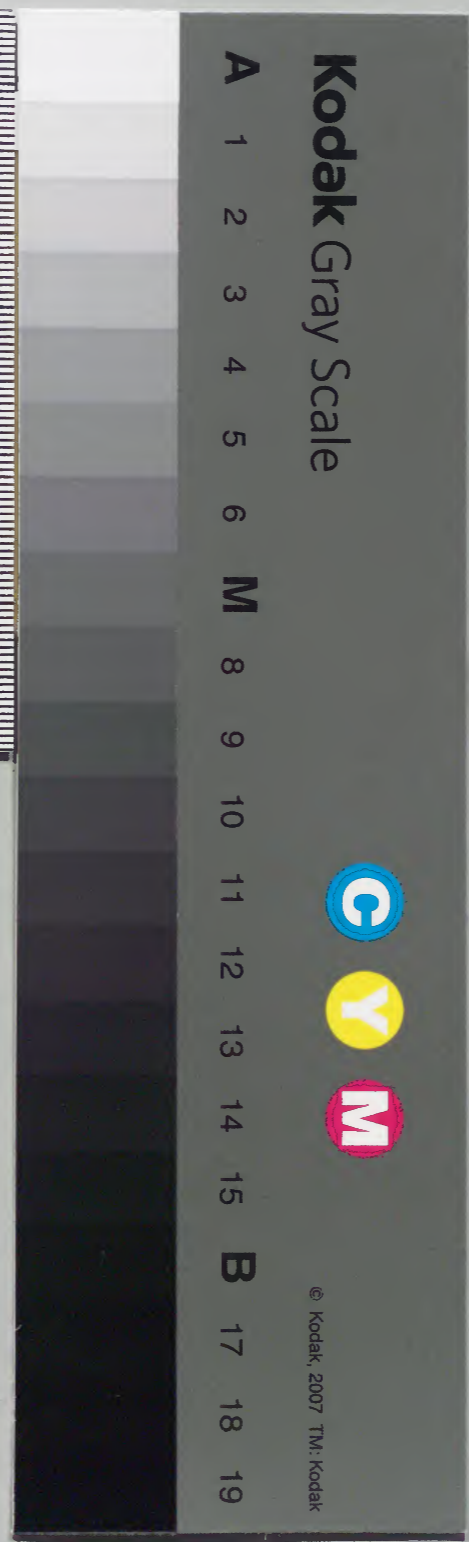
379

庫	文	閣	內
五三	一五	和	
函	五五	書	
二二	四三		
架	冊	號	類

官職 八三

內閣文庫	
番號	和 15543
冊數	3 (1)
函號	153 379

153-379



下

上等棉布

一等棉布

二等棉布

三等棉布

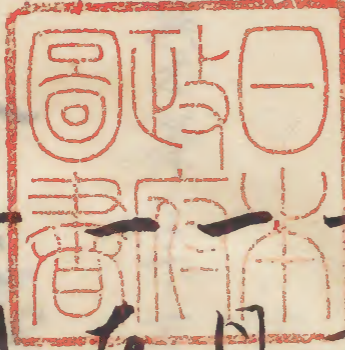
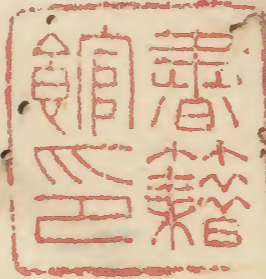
四等棉布

五等棉布

六等棉布

七等棉布

100-250



浅草文库

和学讲谈所

書禮袖珍奕卷第一目錄

- 一 書禮袖珍奕卷第一
- 一 日事浅次才之事
- 一 日事浅次才之事
- 一 日事浅次才之事
- 一 日事浅次才之事
- 一 日事浅次才之事
- 一 日事浅次才之事

- 一 持家清華大旨之事
- 一 門跡方之事
- 一 大中納之書和等公之事
- 一 尚時國之事

一 尚時國之事
 一 尚時國之事
 一 尚時國之事



一 畫物中持家之事

第一

此是也 且須以故為
 心之役 務得之也

異本等字下有之字

家日名

右板為持家之君書於入也

法清右同

一 板為持家之君書於入也
 川了後之君大敏常與任統之史以

日也上右、細川武列左領、武田信玄公
 紙尾之故、右之相調、也於下、世枚落
 幣、六之、僅、く、あ、く、皆、身、領、之、志
 之、至、欲、又、之、又、縁、之、以、之、所、及、信、尹、之、推、射
 一、冊、く、若、者、落、也、亦、一、現、美、者、位、之
 物、重、之、以、之、落、也、之、相、射、之、方、在、油、紀、也
 可、以、取、人、每、年、之、款
 一枚、落、幣、書、面、上、中、下、事

此、之、款、可、以、取、可、領、也、枚、落、は、以、之、案、く、也
 正、氣、也、枚、落、作、此、之、く、也、正、領、也、以、之、作
 此、者、了、氣、也、以、之、如、以、其、方、可、以、領、申、領
 依、此、也、以、之、案、枚、落、入、以、此、也、以、之、案、得、枚、入、以
 正、領、也、此、者、之、作、入、之、く、可、以、之、然、也

第二

可得、即、之、く、恐、懼、治、之、
 之、惟、治、く、と、計、し、
 之、を、受、取、
 之、を、受、取、

右宛下

此字と原本同科書に致し
字と原本同科書に致し

此札

為紙

為書

為

可紙
可紙

右投書物之由也

第三

此何處に
進境進致し

此何處に
進境進致し

此札 貴紙

此紙

此紙

此紙

第四

此何處に
進境進致し

此何處に
進境進致し

此札

此紙

此何處に
進境進致し

右書札等並に用紙簿

此正に此紙

第五

此何處に
進境進致し

五札 西也半

第六

打付書 と 脇付くぬと針書

五札又 打付書

右簿

此簿之六枚名を右大和紙に記すと
書て下之此簿の紙とて幸下書
と為

第七

一

五札亦曰 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

此書松家果と亦凡下之也や

右是より七版

一 幸 浅 神 之 事

第一枚

此紙一枚落しに不書成紙
中丸の或之紙の得紙ハ
此紙正所あり可き

五札亦曰

一奉主君事物之奉

為羊頭之御祝儀御太刀一腰四光

御馬一疋轉光青烟万疋及進之々々

此為舟楫之頭也故為儀之儀之

月日

為之友

為之判

名字及殿

右界之書札也書曰之御判書之儀之他

内封之書也別書此紙矣又之々々々々

一御内書出請之奉

云方御内書

衣加下御書亦後之及乃裁作

年仍

御放御子細御寄存也御儀

此書之紙正紙也故為之儀之儀之

為之友

為之判

定所殿

一 奉書御書解状御下知

御下知

御書

御解状

御解状

去五月

今十五日辰刻

令以裁稱之候に 御書之趣を仰

申得之候に依り此旨を御解状に御下知

御下知

御書

御解状

異本作當時の宛

宛

簿

振付可の宛
御書の事

一 御書之趣を仰申得之候に依り此旨を御解状に御下知

御下知

一 御書之趣を仰申得之候に依り此旨を御解状に御下知

一 御書之趣を仰申得之候に依り此旨を御解状に御下知

御下知

一 御書之趣を仰申得之候に依り此旨を御解状に御下知

一 御書之趣を仰申得之候に依り此旨を御解状に御下知

御下知

定取 坊主 修白法眼沙房 可也

一 法眼と六門跡の御子の名は清く赤くとも法眼
よしたるものありや右の定取は取極極尊
の名もあてし清くや

一 帝王の嫡子と云ふ家ゆり給ふ次の皇子誕生
の付門跡と云ふことと別出するもよまも
文箱にまゝの付門跡の皇子と云ふ御子
たのみな末歳より見門跡して少長給ひ
白言又又ゆり給ふことと人をも依て極取
の位も用ら右門跡に少長也

一 大中納言等相承云卿 御事

某忌持保 名字友 名字判

月日

ちよ 大納言殿 けにわか後より

貴様 中納言殿 持保物可也

此札 幸相殿

くあ申

一 中納言等御事

心持遣

右字及

月日

右字判

一 友を境を納

右武臣も但武家もあつていふ人より

今法中可好し傳

一 法本入江之事

心持遣

但法本入り

月日

右字及
右字判

一 小百本回

控裏の法之史と
院最より少南と云也

心持遣

月日

右字及
右字判

一 友

心持遣

後之に之を以て版に諸国を自列するを
本國にして國とすべしは又花押
より小國より方として國とすべし然らば國
中より版に之を以て版に之を以て國とすべし
より版に之を以て版に之を以て國とすべし
仍可ともそのるるや

大名二字讀替之事

武性當作氏性下同

- 一 大名と云時の武性も根元と稱するものと云
- 一 大名と云時の武性卑りればその身又武性
もその身一と稱するものと云
- 一 守後ハその國の府中と稱するものと云或
は守家定曰

大名 守後 大名 守後

上右公方の七大名

武衛 細川 昌山 三石氏

山谷一色 赤松 高松
此山入と云録と云

一 赤松の葉は赤く秋になると赤く染まる
一 赤松の皮は白く滑らかで油がにじむ
一 赤松の根は太く深く伸びる
一 赤松の幹は直で節が少い
一 赤松の葉は針状で硬い
一 赤松の果は球状で赤い
一 赤松の葉は冬でも落ちない
一 赤松の皮は火に強い
一 赤松の葉は臭い
一 赤松の根は腐らない
一 赤松の葉は乾燥すると赤くなる

一 天香真言
一 柳屋七老
一 西堂
一 方角
一 味
一 山
一 芭蕉

此卷之目録
卷之二
目録

書禮袖珍卷第二目錄

- 一 天名真言之事
- 一 禮家七老之事
- 一 西堂之事
- 一 首尾為之事
- 一 律家之事
- 一 海古宗七老之事
- 一 月蓮流之事

- 一 抵行上人の事
- 一 社僧坊の事
- 一 法我方の事

一 法我方の事
 一 社僧坊の事
 一 抵行上人の事

一 天衣寺の事

上死

一 恐惶敬白

○ 恐惶頓首 二

○ 恐惶謹言 三

宛死

院号一 此寺有院号と貴と寸身二
 寺号二 寺号才之僧正沙房ト書り
 一 僧正沙房二房上リ坊下リ

賜封

一 院号一 此寺有院号と貴と寸身二
 寺号二 寺号才之僧正沙房ト書り
 一 僧正沙房二房上リ坊下リ

一 御見御申 一 天皇之言(計)の
御申

二 御日若御申 二

三 御座下 二

四 御傍中 二

五 御日若御申 四

六 御座下 二

白札

一 御座下 一

二 貴様 二

貴様 二 回答 三 回報 三

右之字より下へ申下末まで何れに

一 御家老宗衣分へ申

上下 御座下 一

二 御座下 二

三 御座下 三

宛下之上

御上 御進 御呈

元下

寺号一
院号二
和号三

以字号才一寺号
才二院号才三
和号才四也

拜進

善養寺 正重

侍者沙中

脇付

侍衣園下

寺ヲ石指六園下ト不
可書之園六家多ク一

乃有書大寺号小脇付大故名ヲ為寺号侍

侍者祿仰 二

侍者沙中 三

也札宛能一上二

祿言祿候也一書て脇付約也

沙中一民亦為善養寺札宛亦為善

書て之下一上二約也沙中札宛也

書て之下一上二約也沙中札宛也

也札之脇付

為者 為者 (と針と糸と事)

一 後諸君と申す一 年書も儀も可儀否
名や

右才一し 黄紙之書極し

一 為堂し事 (七老ニ次テノ堂紙)

右才一の向所 但物定勿給と云世紙極

一 首尾好も云々

前堂後堂可も云々

此三ノ首尾曰前堂
後身墨量首尾曰
及堂又後身月之前後
事勿誤

上

怒地淨し一

。 云々 二

。 不宣致也

。 云々 四

宛不

無名 傳之請々ニ云々
有去ニツ身テ書也紙ハ白小
ナレハ白公トナリ

揚身

侍者 中

下

足下 玉座下 抄下

殿下 字忘下

書忘下 抄下

心札抄身

貴張 抄教 回教 回教

右大元少子降所依其人信作一為之
同安也物重不可定其別出教之六倍
惟證之及少信亦依之由礼不為事可至

之何為之入より下此亦因所奉別
生より之因所奉入八枚為物可於已後
位由礼勿務可より之也

一 七老而堂八寺中院号と書て貴張
平信八道号と書て貴張と書て平信
曰之と書て守信号と書て貴張名号
一 律家之事

宗 忠信抄身 一

。之僧傳之二

定下——寺

揚子

知事法中

法日宿中

也礼揚子

与名之教

責教

一淨土宗七卷之事

^{上示}延僧傳之一

。之僧傳之二

定下——寺

揚子

侍者法中

法日宿中

法日宿中

也礼揚子

右何も傍の後より之
了る者 了報 光報
沙報 回答 回報

一日逆航

上示 恐惶後

。与了後

定所

揚子

清日若海申 山内

必礼揚子 了報 貴報 沙報
右何も可依之人之信仰也
一時守上人の奉
他の上之人に書く他何ハ
時守の氏の内

上示 恐惶敬白

。恐惶後

。恐惶後

定所 寺

御付

一 時守正也列
二 守正也列

一 御付

二 御付

五孔御付

一 御付

一 社務坊之事

一 御付

宗

龍下

一 御付

御付

一 御付

五孔御付

一 御付

内官
長官
印章

一 御付

箱根列
全剛院

一 御付

一 法持方之事

一 御付

辱もは 禁裏御領寺兵衛院等なるは
亦くは傳令の御去ハ有る爰候

一 宗有宗ノ字之り

宗 天名らて御家之外

庇 日蓮庇

守 時守ハ時の役候人なる候

一 上人之字の字之り

上人 天名なき候

上人 傳上宗 日蓮庇

和尚 御家

一 僧家官位事

僧正 官可准
冬候 法務 官可准
上人

僧正 官可准
上人 律師 官可准
上人

法下 官可准
上人 法眼 官可准
上人

法眼法格定准五位百之
正併卷引右之半

法格 位可准位
女上人 凡准位

諸寺之僧及小僧社官僧侶可准地下

口位諸大夫

凡僧可准法眼法眼之僧且以教上之位

以安年中右後之為院卿之也又後

醍醐天皇也也之建武年中也也

大僧正 准大僧
正僧 准中僧

權僧正 准大僧
准中僧

右宣旨

僧正 後正大 僧正 後少大 律師 正友也

法下 法眼 法格 位也

宗廟之時 大僧正之寬海

遺時 寬海大僧正

道山も取りよ

理庵法師

五山者

南禅寺

天龍寺

相国寺

建仁寺

東福寺

万寿寺

古くもや

鎌倉五山

蓮長寺

圓光寺

壽福寺

淨念寺

淨妙寺

者く分や

一法眼といふ八門跡の家子姓名は作ら

れしよ法眼よりなるものも古くは作ら

る所故病物よりなるものも古くは作ら

れしよ

川

書禮神祇頁卷第二目錄

- 一 太刀折紙上中下之事
- 一 日裏書之事
- 一 料紙之法之事
- 一 目錄持之事
- 一 詔文之事
- 一 帶中目錄之事
- 一 番頁折紙之事

△この字は馬之字の肩の趣ら代り書や下
 半は宛下よ書や然れ下ののり下
 半は宛下よ書や然れ下ののり下
 少定りりたり

△右の下の字と右京の字をとりぬり
 代り

修験寺

貞重 ちびや

△治上作之物太刀の右字の中角より書
 代り

下作の時一鴈の角より書や元
 下作の時一鴈の角より書や元

△治上作之物太刀の角より書
 代り

△二字治上と作太刀の角より書
 代り

何々の老派とくを原のくく
 何々の老派とくを原のくく

進上

御太刀 長銘回元 一鴈

○白持ッキ白事
 代り持ッ文刀
 ト云事ト云
 被申
 ○任知ッ銘ノ
 ナキハ銘付
 ノ存ニ持ッ書
 ○作不知ノ作
 ノ物ニ白字
 シ書内事異説不足用

御馬鹿鹿元 一疋

以上 名字友 如示

△此書西の若方色も主人も入るを以て
人よりかかるとも一腰の下に添付と書
可然や足早下の心と云

△右前書教元信に申すは仍記くもや

一二折紙之り
をよと書と解ゆふ事とていふ所は如示

神が上紙三重に 公二方吹ヨリ一枚

雄銀一枚
龍詩一疋
龍鬚

の下よ上ト云ふまじ可書やなすまじ
しむりし為抄や

一兼三二月唐紙御書列増上寺
折紙え信河し

御太刀 一振
白銀 一枚
以上

御太刀 一腰

御馬代金良 一疋

以上 名字友

如示

一二折紙之り

上高者上穿糸袋等並用可也

御太刀 一腰

御馬代黄金高 一疋

空

小袖金子のもの付太刀さのるすもさやん

進上

御太刀 一腰

予鯛 一箱

御提 一疋

以上 名多々

御上中下 御上中下

御小袖 五十疋

金子 百枚

御馬 一疋

以上 名多々

赤山神祇の所々也

御太刀 一腰

御小袖 百疋

一天和年中延寶

比ヨリ力厭上物ノ

節徑様御小袖

裏表ノ又ノ書ニ

近年並書石類程

多有之

御馬

一疋

望

名字及
糸

△日塚書中片御馬疋疋鶴元なと書や

△る代合子と書内ハ何枚と書黄とと書内ハ

何枚と書也

△此の字以とるの字以日書や以下異本無名字及のり

異本作中輩

時、柳ととく〜

一 四折紙のり

片致 糸と傳下書や

流布力 一摺

馬 一疋

と

亦書方、馬と一疋〜〜〜の字〜〜〜の相認

可成り此方一稿より下りし可書なり
を今世にいはれ新入字とよよるは神の字と
くは但可成り云

異本此余無之

右の紙大銀の引およそなり

一 又折紙のり 等

横田染家書名も是より下り
まや他と市下ふまに書けり
うまむが

右方 一稿

一丈

右足まき紙

一 元和二年将軍秀忠公の書名に引由大折紙
抄中いそとらとくと書我々命の書相認
依るに公家元古創式とお趣の

右元禄九年伏見宮の御所にて侍る我々五人
お酒や

一 梅家法華家の石のりへ行く酒のり
お目よりなして書さるや

御太刀 一腰

御馬 一疋

堂上方之元禄九年
改めるといふ列の事

一 公家の法交よりしてハクアノ事

一 平公家元太刀目録酒振りや

一 為賀儀ノ事

太刀目録使者連

二 其使為念辨認

立紙

御太刀 一腰

御馬 一疋

堂上公家

堂下武家

御太刀 一腰

御馬 一疋

一 太刀目録書士書さる

二 担任者
久米スツレハ天

勢先ノ主人

祝手道西有

元終入事

ナリ注北新

枚

何カ六

御カ方

御馬

善

御カ方

御馬

ナトカウ同

名

時地

久

又

何カ六

御カ方

御馬

望

名

右御馬成法

年号 月日 秋田

振

中振

右目下

書半口

列

右

元

井

上

御馬

御カ方

腰

維

右御馬成金子百

枚

年号 月日

井

上

御馬

御カ方

右

井岡

又別紙

若き

御方

御方

御方

御方

御方

御方

御方

△亦目録之表大刀山に御方より毛付をきつて右

目録之通返早又右文字と誤しも右

△之ノ責人の中を付右目録の表を願ひ

と書き立判勿得可なり

△大刀目録表書事一まのこあみん

目二百七程の代又表書可なり

細の代とほりも表をえ

以上より右とひし可なり

程

一他國よりの使者より一別書事

御方この毛付と書き成り

表書いふのこ

事より御方一腰

下留守ハ一腰の脇

貞宗ハ此のより目録

より上作と可なり

より事いふもの

まじりりぬりの付ハ湯太刀一搦 此馬

一疋 ちりよすくよ書可也や

△ちり目録 目録は本は洋紙のりりりり

くぬじりのぬりをぬくわしき書可也

や又言ふ可く可くもえきや

△ちり目録 目録は本は洋紙のりりりり

なりりりりの付ハ湯太刀一搦

一 料紙之法々々

此条異本あり

武家ハ古より名紙とていふの子と二留りて

書物と混るもみ書紙すらのちよ天正の

比より世帯紙のものも然りとて厚料紙の紙は

たふの和陽紙信尹とてとて来りて得て

しし示るは金成御湯洗書たは任勢圓月

北畠教則を身り圓月を身り好願は今

下ぬくや

一 料紙長の事 平紙より二倍の長さハねる

四方をとりて杵の形にして可書く、唯
 然書けり共中へ之をさうやり得
 一 目錄本 目錄の形をさうやおぼしめし
 一 之身之表とぬる格との趣や

進上
 白鳥 二
 鷹 三
 瀬 折

麴 一折
 海月 五桶

已上
 名を
 案

一方目錄の形をさうやおぼしめし

之より得

一 一番田河二番海三番梅曲物の形をさう

可書くや

一 格をゆえに可書法無類や他後言々付
 ハる見格を中奥類や小袖厚付ハ
 格の格よ可書さるや
 一 ちりりけし先よ記す
 一 目録は入るも瑞作よりと
 一寸六もや他寸八方より

進上 二
 鴉 五
 翹 一折
 御少袖 六重
 御傳 六荷
 同上
 名字及
 名宗

右をよと係とよむる名宗と係中神のこしとよむ

おし可きまじり

一 魚草日原之草や

さるよめた
こつしきり
あせり
しきり

鶴梁

なまりの清松と
まは可ぬし
りあう

御梅 御折 御登臺 進

左 行松

舞臺

右と名字友名宗と進しと中一の正可

まがし 舞白あ

一 折と一言とよまのすは横田のじきんあ

後まきそんたおのたしと名しりか

あ一巻とさり

一 おみやまのあまらうきいさ名とすまへ

一 進とまあ

一 進とまあ

日康は父信のまゝ日康は一書の下母教と云ふに
は父のまゝにまゝの下母教と云ふに

進上

一純子

一唐布

一泡書

一丁子

己上

一〇四〇年三月五日

和未書

一〇四〇年三月五日
進上
唐布
泡書
丁子
己上

名
上

右之極相を言ふに當時専下母教と云ふ申

や不吾母は存すと云ふは元康のまゝに

元信のまゝに存すと云ふは元信のまゝに

當時下母教と云ふは當時下母教と云ふに

自他を言ふに存すと云ふは自他を言ふに

進上

一綿

三音把

名
上
進上
唐布
泡書
丁子
己上

一折紙祖伝之
 一糸紅 百斤
 一純子 百端
 一全禰 百端
 一星根 百星
 一上 名字及
 一貴人外其身之家と名、極と
 一凶人

進上
 万足
 一 名字及
 一 名字及
 一 名字及

一 廿中 方に 目録 事

万足

も 家 目 事
ト 可 事 目

万足

このことひ
ふりしこと
よせてく
たきのけ 字 目 事
後 目 事

万足

堂 教 事
名 事
紙 スル

万足

も 事 目
事 目

右より人の世の中は男のゆかりを
のゆかりを名を及ぶるを除く

よしよきものきりやにけり

一 世中より男のゆかり

一 是れ傳

右より人よりのゆかりを

一 たりゆき書く事等

まきゆきゆきゆきゆきゆき

可成りゆき

一 香典新紙

上よりゆき進上名

ゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆき

万疋御書真

一 右に等々なる付に御字と係可ぬや亦中紙の上ハ此字可ぬと云く何れもその真なりまて上中下の区可ぬを別りや
一 云方縁佛事と云書典の折紙御紙の事

御經 一部

万疋 御書真

以上

此可ぬ
別り

御書真銀子 復

右の紙一疋しと云くしと云くして書くこと

一式正引か物日服之事

進上

御太刀

御弓

御篋

御鏡

御烏

笠

一腰

一帳

一腰

一領

一疋唐七

名考

名

右様より先よ書奉り可きくは
多め多と可身他む板の紙

進上

御太刀

御馬

青銅

以上

一腰長光

一疋栗色

一疋雀目結

名考

名

右様守をよと可し之紙也我身日鶴眼玉州

わし〜の夫名をわすれしを〜
今日あけと書きし紙よ呉れと書き
紙一万丈と針書きしや糸はたつもの多し
書きし紙のしと物も〜
よ書きし紙は紙守右の〜
や紙

一 法をま〜り指丸圓白し打紙

進上

御太刀

一腰

御馬

一疋

笠

名糸

示

御太刀

一腰

御馬

一疋

笠

名糸
右糸

進上

大和

二百

名

足板との越し
そののり、核梅
くさくさとし
り

枚原

百束

毛吉船の方、
のきぬやど
そののり、核梅
くさくさとし
り

干

夏

足吉船の方
そののり、核梅
くさくさとし
り

右端の由は、此の
木敷多能く、
増礼く

大正九年四月廿九日
東京府立第一高等女子学校
校長 藤田 静子 様
敬啓

千歳 辰

松原

